「うん、近所の連中だけど、ばらばらだよ。農業やってるのも、商売やってるのも。一人は、天草の海洋牧場に勤務している奴もいる。」

「天草？」A子はびっくりした。「ううん、ひとっ飛びだ。通勤圏だよ。」

でも、みんな、いい人たちばかりだということがA子には直感でわかる。この中でだったらやっていけるかもしれない。そんな自信さえ感じていた。両親の家に入ると、外観とは裏腹に最新の情報機器が揃っている。父親が、CRTをのぞきこみ、キーボードを操作していた。

「おい、K太郎。おもしろい技術が、またできたらしいぞ。〝唄う椎茸〟ができたらしい。」

「……椎茸が唄うんですか……。」

「ああ、湿度によって傘が共振作用をおこす種を作りだしたらしい。パソコンネットワークで、そんな情報が入ってる。」

A子には、とても信じられない。椎茸が唄ったりするなんて。バイオ技術も、そこまで進化したのだろうか。

「何と、開発したのは、隣のU夫らしい。」

あわてて、父親は、外へ飛びだしていった。それからあたふたと帰ってきた。

「ほんとうだった。しかも、新種を開発しとった。第一段階では、ドレミがやっとだったそうだが、今度の奴は、ワーグナーのジーグフリードを原語で唄う椎茸らしい。一つ借りてきたぞ。聞いてみるか。」

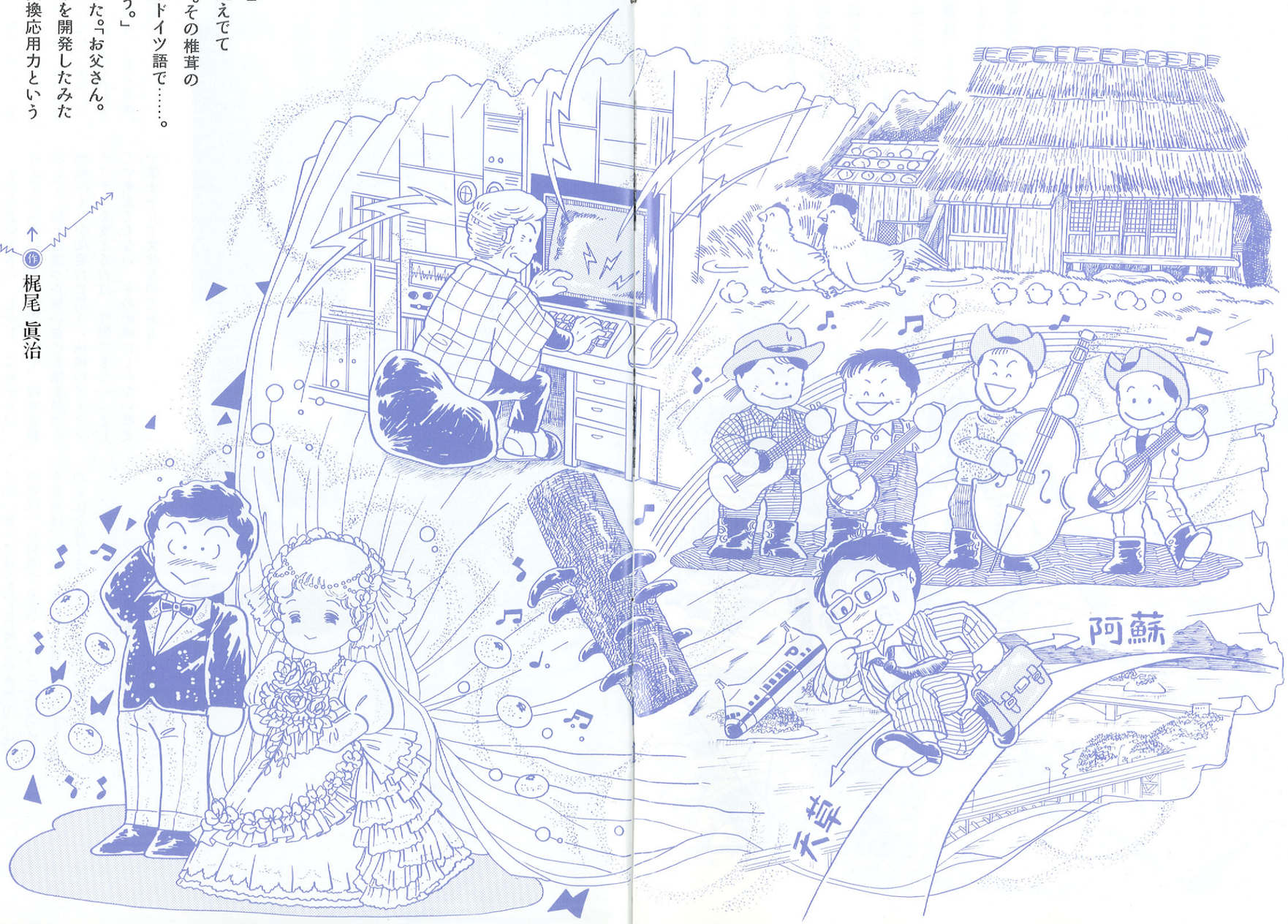
小っぽけな棒にたわわに椎茸が生えでていた。椎茸で原木が見えないほどだ。その椎茸の傘が震えだし、曲を奏でる。朗々たるドイツ語で……。

「何とど迫力の文化的椎茸じゃろう。」

K太郎がCRTの画面を指で示した。「お父さん。八代では、カンツォーネを唄うイ草を開発したみたいですよ。へえ……何とも技術の変換応用力というのも凄い早さですね。」

A子は、そんなK太郎と父親のやりとりを見ながら、なんとも、刺激的な生活になりそうだという予感を持ちつつも、まだ玄関先でニコニコしたまま立ちつくしていた。

きっと結婚行進曲は河内みかんや、椎茸やイ草の大合唱になるだろうという予感を抱きながら。



作 梶尾 眞治

イラスト 百鬼丸